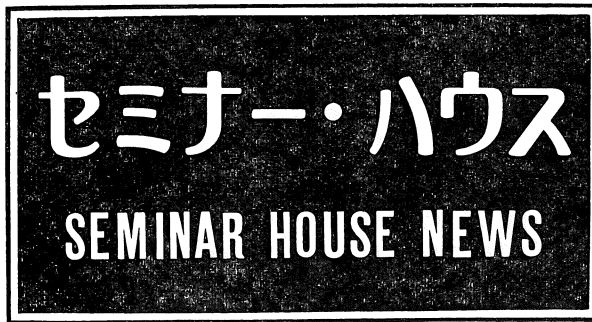


内容

大学共	セミナー	2
七ミナ	・ハウス	
大印	記(1)	4
学象	・シリーズ	
大第	集刊行	6
七ミナ	・ハウス	
七印	記(2)	8
美印	・ハウス	
利	・ハウス	
用	・ハウス	
状	・ハウス	
況	・ハウス	10



発行

財団法人 大学セミナー・ハウス

《所在地》 東京都八王子市下柚木
 電話 0426-42-041-2
 《東京事務所》
 東京都中央区日本橋本町3の3
 三井銀行本町支店ビル3階
 電話 東京(270)4431
 振替口座 東京74590番

編集・発行人 飯田宗一郎
製作 中央公論事業出版

私はお慶びにかえて、一言、私ながらの所感を述べたいと思う。現今、学生数がどんどん増えている。これは日本の国民のかなり多数の者が大学教育をうけ、大学レベルの教養と技術を身につけるといふ意味で良いことであるが、こうした事態はある意味では大学本来の機能を阻害していつている。ステレオ型の人間をマスプロの方法でたくさん造り得ても、本当に精神的に高い人間を造り出せるかどうか疑問である。

いつも思うのだが、明治維新の前後に活躍した人たちは二〇歳そこそこですでにだいたいの人間形成をなしていたという感じがする。当時は今のようには進んでいなかったにもかかわらず、彼らは何か人生に対して確信を持っていて、どこにも出て臆することはないといった風をもっていたようである。これは一体何故かと考えてみるに、少なくともその理由の一つは中国古典の勉強にあったようだ。七歳頃から素読をはじめ、十六・七歳になると、もう読むべしと定められた本は大部分読んでしまう——みんな読んでというところが非常に大きな自信を当時の人たちに与えたのではないか。

しかも読む内容は、人間生活の長い歴史的な経験を集積・凝集した、「具体的な人間学」という言葉でいしかえうるものであったと考える。この人間学は人倫的規範はもとより、ある特定事態に対し

てどう対処するかといったようなきわめて細かいところまで具体的に教えていて、人生を送る上に役に立つようなものだったと思われる。さらに学問を教える先生が、またこの人間学で人格を造りあげた人だったことも重要な事実である。人生問題に悩む学生は、先生と問答することにより、彼の問題を解決できたのではなかったか。したがってここで先生は、若い者にとっては生きた理想像ともいえるようなものだったのであり、すぐれた学者のところには全国か

学問の本質と

セミナー・ハウスの役割



朝日新聞社顧問 笠 信太郎

には何らのつながりもない。経済学と物理学と心理学——この間にはほとんどつながりがない。それどころか、経済学の中でもケインズとマルクスの体系はつながらないと私は考える。これはそれぞれの科学、学説のスタンドポイントが違うからであって、いい換えるところ、科学全体はばらばらのものである。これを統合することは今のところできないと私は考える。

つまり、対象の理解に必要なのは、第一に学問の広さと深さ、第二にこの学問を具体的事実

らの秀才が集まってきている。この形は当時の時代のわくの中のものであったが、こうして人間ができたのである。今日ではまた当時と事情が違って自然科学や社会科学が学問と教養の全部である。この科学は抽象的なことが第一の特徴で、生きた人間とは関りが少ない。人間に関する科学は多いけれどもどの科学もすべてある角度から人間の一面のみをみるにすぎない。そのため、その断面の追求を深くすればするほど、生きた人間からは遠ざかってゆく。また、科学同士の間にも原則的

に適用することからくる経験の累積といえよう。この二つにより私たちはだんだん真実に近づいてくると、現代の人間としての内容が豊かになってくる。こういう事情の下では近代的内容を持った人間ができるのは年齢的に遅れる。

若い人たちは、学問する途中で、人生的問題と自分の勉強しつつある仕事の関りは何だろうか、自分がたどっている道は森を通りぬけて必ず頂に出るだろうかというような疑問を持つようになるが、こうした疑問は専門科学の研究では答を見つげ出すことがで

きないから、すでに経験的に科学の位置や立場を十分に理解している人たちがこれに答えてやらなければいけない。換言すれば、近代的な姿で人間のできた人が学生の指導にあたらねばならない。ところが今の大学はこうした指導者と学生とを内面的に結びつけることを非常に困難にしている。大学の本来の機能をとり戻すためには、互いに近づき、接触してカンパセーションを交わすことのできるゼミナール形式以外にない。真面目な学生にとっては尊敬する指導者の一言の与える影響は非常に大きいものであり、その言葉の効果は、学生が、自分で考えぬいた疑問をぶちまけた時にさらに強大になる。ゼミナールの接触がないと、今日までの学問の成果は学生に伝え得ても、学問的なものの考え方はなかなかわからない。学問の製造法といえるものは、学者と学生との間の会話から自然に出てくるものである。会話により現代科学の抽象性を理解させ、その抽象性をうめ合わせる働きを自覚させるのだ。これがまた人間そのものが少しずつできてゆくことに通じる。

そういう意味で、このセミナー・ハウスが現在の大学の欠陥をうめて、志を持つ若い学生によりきチャンスを与えることができたなら、これは一人その学生の幸福にとどまることではないと思う。

(落成式祝辞概要)

大学共同セミナー



第三回大学共同セミナー

主題 ■科学と宗教 (昭和四一年一月一四・一五・一六日)

【全体講義】

A 科学と因果性
東京大学名誉教授

山内 恭彦氏

B 宗教と合理主義
東京大学教授

中村 元氏

ゲスト講義

上智大学副学長 柳瀬 睦男氏

【セクション別指導者】

A 物理

上智大学教授 鈴木 皇氏

B 化学

明治大学教授 山本大二郎氏

C 生物

国際基督教大学助教授

勝見 允行氏

D インド

国学院大学助教授

三枝 充恵氏

E ヨーロッパ

専修大学教授 市倉 宏裕氏

F 日本

日本大学助教授

今井 淳氏

【運営委員会】

委員長

早稲田大学教授 川原 栄峰氏

委員

日本女子大学助教授

一番ヶ瀬康子氏

明治大学教授

藤井 耕一氏

東京大学助教授

西村 秀夫氏

【参加学生】

計九〇名(うち女子五三名)

日本女子大(二七)、東京女子大

(一五)、東大(九)、武蔵工大(四)

早大(五)、慶大(四)、東工大(四)、

東京医科歯科大(三)、教育大(三)、

津田塾大(二)、お茶の水大(二)、

電通大(二)、上智大(二)、一橋大、日大、中大、立大、青山学院大、明大、東京薬大、国学院大、各一名

現代のように科学技術が目覚しい進歩をとげつつあるとき、人間はより高い精神生活を営むことを心がけなければ、科学だけが優先してしまふであらう。人間が忘れられた科学、もしくは科学を否定した精神生活は、ともに学問のある人間の態度ではない。

東洋人の思维方法が日本人として宗教を理解するには必要である。宗教を認めているすぐれた自然科学者の人間学的立場をきくことが、科学と宗教の限界を知る上に必要である。科学の進歩によって、未知の世界を学問的に説明できることが多くなった。

科学と宗教がまったく矛盾なく心の中に一致している人間の見本として、カソリックの信仰を持ち物理学者としても知られている上智大学の柳瀬副学長をゲストとして迎えたことは、山内博士の仏教論とともに、科学者のキリスト論をきくよい機会であった。

セクション・リーダーの各教授も専門分野で深夜に及ぶ熱心な討議を行なった。そして、科学と宗教という二つの大きな問題を抽象論に終らせず見事に調和させ、人間を前面に押し出した一般教育的成果をあげることができた。

音楽社会学セミナー

(第一回・昭和四〇年二月一九日)

新しい試みとして

指導 東京大学教授 松田智雄先生

特別に音楽セミナーを計画した理由は二つある。開館記念として日本ビクターから寄贈されたステレオがあるので、学生諸君にすばらしいレコードをきかせてあげたいという願いが第一である。第二はセミナー・ハウス企画委員として創立以来の同志の一人に音楽に造詣の深い松田智雄先生がいることである。松田先生はご自分からこうした計画を持っておられたが、クリスマス・シーズンを機会として実現したわけである。したがってレコードも宗教的なものとなった。ラウンジを会場として、年の瀬も近い一二月一九日の午後四時から九時まで、同先生の解説のもとに、なごやかなクリスマス音楽を楽しむことができた。

出席者の大学別は次のとおり。早大(七)、日本女子大(七)、東京女子大(四)、法大(二)、教育大、東大、外語大、慶大、東工大、上智大、東京医科歯科大、東邦医大、各一名。計二八名。ほかに大学のセミナーでできていた各大学の学生も特別に参加され、合計五十余名の参加者であった。

《プログラムの概要》
A 講義——音楽への道
音楽は心のうた、音楽は心の

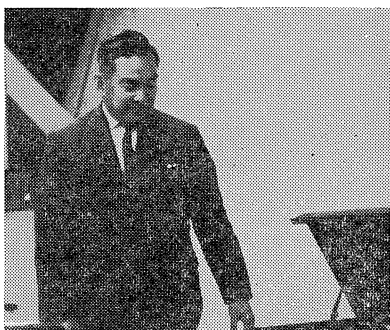
ことばであるという立場から音楽に近づく基本的態度を示され、音楽が生まれる文化的条件を知ることの必要を説かれ、音楽社会学ともいふべき新分野が存在するというのがその概要である。

B レコード

宗教的民謡(クリスマススのうた)、クリスマス楽曲(メサイア、クリスマス・オラトリオ、ヘンデルとグレーテル)

なお今回のセミナーは、東京芸術大学教授服部幸三先生によって本年度連続四回開催される、音楽文化セミナーの第一講に当たるところである。

松田智雄先生



第四回大学共同セミナー

主題 ■「新日本のビジョン」とその批判

〔昭和四一年三月二六・二七日〕

【全体講義】

国際基督教大学客員教授 蠟山 政道氏

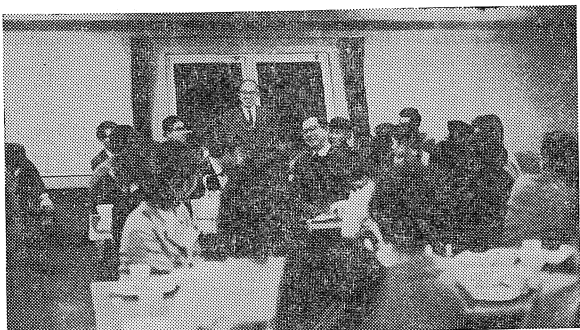
【セクション別指導者】

A 社会主義と実存主義 中央大学教授 武藤 光朗氏

B 日本経済の将来と国家の役割 慶応大学講師 原 豊氏

C 新しい産業社会 東京大学講師 富永 健一氏

楽しい食事時・語る蠟山先生



D 戦後史を考える 学習院女子短大教授

原 敬吾氏

【運営委員会】

委員長

東京大学助教授 西村 秀夫氏

委員 東京女子大学助教授

根岸 愛子氏

日本女子大学助手 山本 和代氏

上智大学教授 鈴木 皇氏

【参加学生】

計七五名(うち女子二五名)

武蔵工大(一一)、早大(一〇)、

日本女子大(六)、津田塾大(六)、

一橋大(五)、東京女子大(四)、

東大(三)、慶大(三)、東工大

(二)、明大(二)、法大(二)、上

智大(二)、都立大、東京医科歯

科大、東京農大、東京学芸大、成

蹊大、東京神学大、各一名

◇

前年度最後の共同セミナーとして、学年末の多忙の中を、しかし学生は長い休暇の中にあるので、この機会を活用して、政治学者として、また実践者としても高名な蠟山政道先生を煩わし、日本の将来について考えた。現代の青年

—明日の日本と運命をともにする青年—が確乎として政治的理論のもとに新日本のビジョンを懐くことはきわめて緊要なことである。

『新日本のビジョン』の著者でもある蠟山先生は非常な意欲的態度でこのセミナーに出講された。集まる学生諸君を平和のヒナ鳥に育成したいという熱情があふれていた。日本人は原子爆弾の体験をした唯一の民族である。歴史の体験から生まれたビジョンでなければならぬ。ここで注意しなければならぬのは、ビジョンとイデオロギーを混同しないことである。ビジョンは純粹であり、明日の可能性を有する。イデオロギーは組織の指導者から与えられたものである。ビジョンは自分で考え、自分で把握したものである。現代は近代化最後の段階である民主主義時代である。それを達成するためには政治的素材だけでは不足で、倫理的なものが価値体系の中に必要である。

民族の心が真空であることは許されることでない。急に生まれないうであらうが、歴史の教訓に学んで、忍耐をもって未来につらなるビジョンをつくるべきである、というのが主なる要点であった。

現実の問題として、政治を離れて人間のしあわせはつくれないのだから、このセミナーは若い人々にとり市民意識の形成へ役立ったであらう。

ゲスト・プログラム

セミナー・ハウスの特別番組

▼第一回

〔昭和四〇年二月一八日 夕食会〕

日本育英会会長 森戸辰男先生

▼第二回

〔昭和四一年二月二六日 夕食会〕

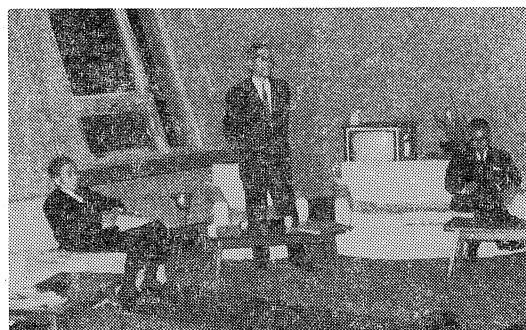
一橋大学学長 増田四郎先生

セミナーにきている、いくつかの大学の学生が食事をともにしながら交歓をなし、食後に先輩の話をきく機会をつくりたいというのが、このゲスト・プログラムである。

森戸辰男先生(中央)と夫人(左)



増田四郎先生(中央)



る。人生の先達または学問の先輩から、じかにお話をきき、その人格にふれるよい機会でもある。

第一回は森戸先生ご夫妻を招き、セミナーにきていた東京女子大と中央大学の学生を交えて、夕食後一時間、クラーク博士のことばをうけとめて感動した学生たちの心構えについて、第二回は増田先生がご来館になり、夕食後ラウンジで東洋大学と中央大学の学生を相手に西洋文化について語られた。

セミナー・ハウス印象記 その1

利用した教師のことば

探し求めていた施設

東京大学教授 斎藤 真

大学セミナー・ハウスの縁は、昨年九月、大学院の演習グループで利用させていただいたことにはじまる。大学院は、学部と異なり、出身校もいろいろあるし、それに外国からの留学生も多い。昨年のグループでいうと、韓国から三名、台湾から三名の学生が参加していた。総勢一五名のグループゆえ、三分の一以上が外国からの留学生ということになる。

ところが、これらの外国からの留学生にとっては、日本の教師や学生と交わる機会がはなはだ少ない。こちらも気持ちの上ではその機会をつくりたいと思いつつも、それを実現するには時間も施設も乏しいというのが、申し訳ないながら実状であった。そこで、私も数年前から大学院の演習で外国よりの学生の割合が高い時には、せめて年に一度どこか東京近辺で親睦をかねて演習をするように心がけてはきた。沼津の共済組合寮などを利用したこともある。それ

夕食後はじめられた演習は、すっかり熱をおび、夜の一時にまで及んでしまった。自然の中に独立してたてられた教室ゆえ、議論が熱しても他に迷惑をかけることもなく、それだけ気がねなしにすすめることができた。ただ、若者の顔には、夜食を用意してくるんだったという残念そうな表情があ

自由で節度ある生活経験

成蹊大学教授 肥後 和夫

セミナー・ハウスの評判は、学部の同僚である安藤、広野両氏よりかたわががっていましたが、わたくしのゼミナールでも去る四月上旬に二泊三日のスケジュールで総勢一六名が施設をはじめて利用させていただきました。そして一行全員が、かねての評判どおり口を揃えて快適であったと喜んでおられますので、はじめにこのことをお伝えして、この施設の計画を推進せられ、あるいはその運営に努力しておられる関係者の皆様に謝意を表したいと存じます。

一行の所感を思いつくままにまとめてみますと、とくに好評であったのは次の三点でした。
第一は、施設がよく整備せられ、かつ機能的であったことです。わたくしどもが利用したのは第五群でしたが、清潔な寝具と快適な暖房つきの二人用の個室とセミナー室の連絡がよいため、お

りありと認められ、誰かがもってきた一箱のキャラメルの残りが、貴重な食糧となる。
翌日、マイクロ・バスにゆられて、セミナー・ハウスを後にした時、来年は夜食をもってくるぞと当然来年もくることにしていたある外国人学生もいた。

い周囲の眺望です。起伏のゆるやかな丘陵の重なりあい、段々島谷あい点に在る農家などのかもす、のどかな美しい田園風景は、都会生活で疲れた神経を心よく休めてくれました。勉強の合間の軽いハイキングで、われわれはこの自然を満喫しました。

ちついた勉強ができました。また費用の割に食事がよく、かつたべ盛りの学生にとってご飯のお代わりができたことがありがたかったようです。

第二に職員の方々が皆さん親切で、学生を紳士として遇されたことが、学問をするにふさわしい気品のある雰囲気づくりに貴重な役割を果たしていたことを強調したいとおもいます。

第三に、東京都下にまだこのようなところが残っていたのかと、いまさらながら驚くほど素晴らしい

人間形成の道場として

日本大学教授 岩井 肇

私が学生とともに、このセミナー・ハウスをはじめ活用したのは、開設早々の去年の十一月だった。最初の印象が大変よかったの

で、それから四月までに四回学生との合宿研修に利用した。

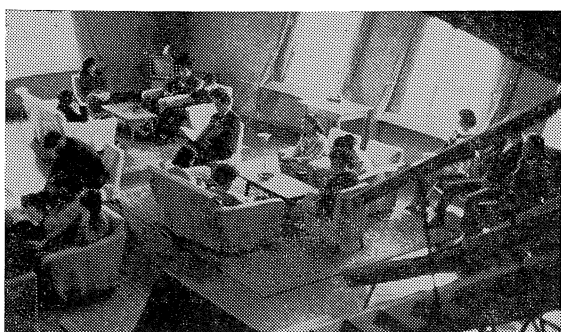
去年の秋、新聞でこのハウスができたことを知った時、大変興味

をもったので、まず試みとして、私のゼミナールの学生と一緒に一夜の研修会を開いたものだ。

学生は自分たちの個室で夜おそくまで、いろいろと話し合い、夜の更けるのを知らぬものもいた。これは大変気に入ったようだ。

七つのブロック毎にセミナー室があって、ここで落ちついた気分で研究討論に力を注ぐことができていることは、環境の点、設備の点から楽しいものであった。ことに中央セミナー館で六〇名ぐらいの学生が、問題を中心に議論に花を咲かす情景は、まことにセミナー・ハウスらしいムードが漲ったもので満点だった。

休憩時間にラウンジで音楽を聴く



異様な姿の四階建ての本館建物やその中に配置された大きな食堂ホール、自由談話室、レスト・ルーム、ゲスト・ルームなど、いずれもよい感じを与えるものであった。ハウス設立創案関係各位の学究的・思索的な構想に敬意を表せざるをえなかった。

天気の良い朝など、ハウス付近の丘陵から、はるかに遠く富士山のスッキリした姿も眺められ、また野猿峠の上から、展望できる遠近の景観も胸のすく思いをさせる。夜半、窓外から澄んだ夜空の星を眺めるのも、都心では味わえぬものだ。

このハウスが学生の研修合宿に効果をあげ、また教師と学生や、学生相互間の接触による、人間関係のつながりを強くすることは特長と思うが、これは七つのセミナー室とともに、二人宛が静かに眠ることができるユニット・ハウスがあることで、このユニット・ハウスが、セミナー・ハウスの最も効果的な特異点だということができると思った。

そこで、これらたくさんの特長に対して、さらに合宿研修の上

若い指導者をはぐくむ

東京教育大学教授 馬場 四郎

私はこの冬から春にかけて、再度大学セミナー・ハウスにお世話になる機会があった。最初の経験

望ましい点の二、三を記してみた。第一にスポーツの設備が欲しいことだ。学生がせめてこれぐらいいはと望んでいることはソフト・ボールやテニスなどのできることである。しかし、現在の地勢状態ではそうした運動場を作ることには容易ではなからう。一、二泊ぐらいの合宿なら格別運動場はいらぬが、四、五日以上も合宿する場合は、そうした設備が欲しい気がする。

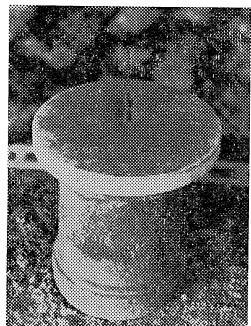
その大規模な設備ができるまでに、まずピンポン程度でも欲しいものだ。それにハウス付近には樹木が少ないが、植樹をさかんにして、静かな自然の世界にしていることが望まれるし、また学生によつては、夜のキャンプ・ファイヤーを望むものもある。森の中のキャンプ・ファイヤーは沈思と冥想を深めるに役立つこと大きいものがある。

学生はこのセミナー・ハウスにきて、学問研究の環境にひたるとともに、人間形成の道場としての効果を期待しているものと思われるので、これらの点を考えて、さらにハウスの完備を切望したい。

で永年続けてきた大学院学生とのOBの合同セミナーをここで持つためであったし、二回目は私がこんど新しく世話をすることになった、学部の三年生のクラス(教育学科)との接触を深め、教官と学生とがなるべく親密な人間関係を結べるようにするための顔合せの意味をもっていった。

二月上旬のセミナー・ハウスはまだ冬の最中で本館をめぐる周囲の植込みの木々も裸の姿であり宿舎の方の手洗いには、朝、氷が張る状態で、寒い時季だっただけにスチームの暖かさがたよりに感じられた。四月下旬の折りは木々の梢にも新しい緑の芽が萌え、折りからの雨にふりこめられて、雨傘をさして本部と宿舎との間を幾度か往復する折りにも、格別の寒さを感じない快適な状態であった。

二回の経験を通じて共通に感じられたのは、ここの施設や設備がまことに洗練されていて、これからの日本の若い指導者をはぐくむのにふさわしい家具・調度類を備えており、学生にこういう環境での生活を味わせてやれることは、大学の教師としてもまことに好都合である、という感想である。これと同時に、夕食が思いのほかにご馳走で、学生に栄養のある洋風の料理をたっぷり味わせてやれることができるのはありがたかった。テーブルでのマナーやエチケットなども、こうした機会をとらえてしつけられることは、私の大



中央庭園にある日時計

学のように地方出身の学生を多数かかえている場合には特に利用価値が大きい。

一回目は冬のさ中だけに、他大からの利用者がまったくなかったのだからなかったが、二回目の際には、私の方のほかに五つの大学から利用者が顔を合わせ、宿舎はほとんど満員に近い盛況であった。ここがインター・ユニバーシティ・セミナー・ハウスとよばれるわけが、二回目の折りに夕食後の交歓会を経験してはじめて納得できた。これを儀礼的な交歓会以上のものにまで発展させて、セミナーそのものの内容を結びつけるような実質的な交換教授・交換学習にまで進めることができるならば、セミナー・ハウスの魅力はもっと大きなものになるにちがいない。そして私のこの期待はすでに、部分的には満たされているようである。この次に参加する機会があれば、そうした形の実質的の大学交流をぜひ実現してみたいものである。

大学セミナー・シリーズ

第一集刊行なる

大塚久雄著 ―「ヴェーバー社会学における思想と経済」

シリーズの企画を意味づける

―高い内容の論文をもつて―

刊行を祝して

手塚 富雄

大学セミナー・ハウスは、多くの準備を経て開館して以来、すでに一年有余になりますが、現在のわが国の大学教育の欠陥をうめることの一助になろうとする使命は着々と果たされています。すなわち各大学の垣を除き、学間を中心にして都塵を離れた美しい自然のなかで、人と人とが寝食を共にしつつ接触、対話することによって、お互いに人間形成を進めていくこととするのであります。そういう目的のために、セミナー・ハウスは多くの申込みに応じてその場を提供しているのであります。さらにセミナー・ハウス自身の企画として、学間各分野の一流の先生方をめぐってセミナーを行なうことを重要な事業としており、落成を記念して、昨春秋、大

(東大名誉教授
前企画委員長)

マックス・ヴェーバーという、カール・マルクスとならんで社会科学の歴史の山脈に聳え立つ巨峯の名は、「現代」という時代がすぐれて世界史の巨きな転換期であるという認識の深まりとともに、いよいよ広く人々の心をとらえていきつつある。一昨年（一九六四年）のヴェーバー生誕百年にあたっては西独の古都ハイデルベルクで三日にわたるシムポジウムと祝典の行事が華やかに行なわれ、我

国でも東大で各学問分野の専門家が

でなく、これほどまでに広く一般読者層の関心をよび起こすまでにしたったのは、いったいどうしてなのであるか。もとよりその理由は、さまざまに考えられるであろう。わたくしは、ここではとくにその一つの大きな理由として、「思想」が歴史の動きのなかで占める重みをまともに受けとめることなしには、もはやこの「現代」というわたくしたちの生きていく時代を理解できなくなっているという、いわば時代の要請とでもい

◆書評◆

歴史の転軸手としての「思想」

立教大学教授 住谷 一彦

が集まって二日間のシムポジウムを行ない、両者ともに数多くの参加者を集め得たことは、すでによく知られているところである。ところで、その質ばかりでなく量においてもマルクスに匹敵するほどに膨大な論文その他の原稿を書きながら、そのほとんどが一般読者の手にとどかぬ学問界その他の専門誌に埋れたまま、彼の生前ついにまとまらなかったで世に現われなかったヴェーバーの思想体系が、単に専門家の世界においてばかり

うべき歴史的境位をあげておきたい。という意味は、こうである。マルクスは資本制生産が全一的に支配するにいたった近代市民社会における人間の自己疎外（ブルジョアジー、プロレタリアートのいづれをも含めての）を回復するプロセスを追及して、結局において人間そのものの階級的定在の止揚をおいては他にあり得ないという方向を指し示したのであるが、彼のそうした資本主義批判の理論形成と現状分析とが、経済的、諸利

害の階級的な在り方によって一切の文化領域（法・政治・学問・芸術・宗教等）の運動が究極において制約されているのだという彼に独自の歴史認識、いうところの唯物史観に支えられつつ行なわれたことは、すでにあまねく知られているところである。マルクスの唯物史観は、このように歴史のなかで人間の生の営みである文化の全領域を総合する文化統合の原理を提示することによって、歴史過程の全体としての動向をつかみうる思想としてすぐれて「現代」的な意義を担うにいたった。しかし、マルクスの歴史認識がその徹底性において深刻きまるものであっただけに、その思想が人心をとらえて一つの巨大な物質力となればなるほど、歴史過程が包蔵するいま一つの基礎的局面向が、それへのいわば対重としていよいよ人びとの関心をよび起こすことになる。マルクス以後、思想史のうえで巨匠とよんでさしつかえない人びとはその点に想いをひそめてさまざまな構想を提示してきたのであるが、視野の広さ、豪胆な構想力、論理の強靱さ、さらには何よりもまず対象に迫る徹底性においてマルクスへの対重としての位置を占めるものは、結局のところマックス・ヴェーバーをおいてないといえる。それならば、ヴェーバーはさきふれた歴史過程のいま一つの基礎的局面向をどのようにとらえたのであろうか。大塚久雄氏の説



大塚久雄先生

明するところをかりると、こうである。「経済的な利害状況は一つの対極であり、それに対するいま一つの対極が宗教あるいは思想、そしてこの両者のあいだの緊張関係が歴史過程を押し動かしていくダイナミズムなのだ」(大塚久雄『ヴェーバー社会学における思想と経済』四一頁、大学セミナー・シリーズ)と。すなわち「利害状況」というものが歴史過程のなかで諸個人を動かしていくのだが、歴史の曲り角ともいふべきようなところでは、やはり理念が決定的な作用をすることになる。……つまり、新しい、より高い理念が出現して、歴史のなかでそれを押し動かしていく利害状況にまつたくな道道をさし示すことになる。つまり、歴史の進む方向をぐいとまげる。そして、そのあとは利害状況が、こんどはその新しい路線のうへで歴史をおし進めていくことになる」(同書五〇頁)。このような理念ないし思想と利害状況との相関・緊張・補充の関連において

歴史のダイナミズムをとらえようとするヴェーバーの複眼的な歴史認識は、とりわけ日本ではいよいよ比重を増してくるよう思われる。それは、こういう事情からである。わたくしたちは、隣りの中国六億の民が日毎夜毎に毛沢東思想でもって武装されていくプロセスを眼のあたりで見せられていく。一九六六年五月一日の「人民日報」は「政治第一」(毛沢東思想優先)を堅持して工業生産建設の新しい高まりを促進しよう」と題する社説のなかで、「国内では、毛沢東思想を学び活用する高まりにつれて、イデオロギーの各領域においてプロレタリアを盛んにブルジョアを滅ぼす文化革命が起きている。この高まりの中で幾千、幾万の労働農民の積極分子があらわれ、毛沢東同志の著作を生かして学び、これを活用している」と述べ、そうした動向が経済のなかにまで、滲透してきていることを強調している。すなわち、「中国の生産建設の面で起きている新しい高まりは思想面での高まりによってもたらされたものである。……工業戦線において『政治第一』を貫くには、毛沢東思想によって企業を経営する路線をだんこ貫徹しなければならぬ」と。この動きが文化の全領域にまで及ぶものであることは、文学の領域で日本にも知られている郭沫若氏が、四月二八日の「光明日報」の報ずるところによれば、「すでに七〇

歳以上となったが、労働者の血と脂の印を私の皮膚にきざみつけたと思う。私が誤りをおかした原因は毛沢東の思想を誤って学んだこと、社会階級に関する私の考えが混乱していたことにある。今や私自身、兵士、農民、労働者から学ぶべき時がきたし、できることなら今後は彼らのために尽すべき時がきた」という劇的な自己批判を行なったところからも十分にうかがわれよう。中国革命への関心は、同時にいや応なく毛沢東思想の重みを意識させることになる。こうして、わたくしたちは中国の隣国であるという事情によって、世界史の方向を大きく切りかえる「歴史の転軸手」としての「思想」が占める重みに対していよいよ関心をよび起こさざるを得ない状況のもとにある。マルクスに対するヴェーバーへの関心が一般読者層のうちに広く共鳴盤を形成しつつあるのは、たしかにこのようなわたくしたちをとりまいていくすぐ

れて「現代」的な状況布置に基づいているといつてよいであろう。大塚教授の「ヴェーバーにおける思想と経済」は、これまでに何ほどか説明したような「現代」という時代に対してヴェーバーの思想が有する意義を明解に説いて、世界的にみても独自の日本のヴェーバー研究を特徴づけているマルクス・ヴェーバー的思想像をくつきりと浮彫りにしてみせている。そればかりではない。本書は、これまででヴェーバーを研究された大塚教授自身の、いつてみればヴェーバーの大塚的な考え方を提示されたものであり、その意味では世にいう「大塚史学」の「方法序説」とでもいふべき位置を占めるものである。想うに、本書を味読されることによって、読者はわたくしたちの拠って立つ歴史的境界がどのようなものであるかを、より深く認識されることであろう。

▼大学セミナー・シリーズ第一集▲

東京大学教授 大塚久雄 著

『ヴェーバー社会学における思想と経済』

定価 二二〇円

▼発行/大学セミナー・ハウス
▼発売/みすず書房

文京区本郷三丁目一七の一五
電話(八二)〇八六三・〇九二八

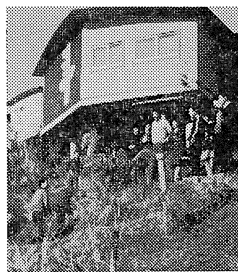
●最近の寄贈図書

- マックス・ウェーバー研究 大塚 久雄殿
- 国民経済 増田 四郎殿
- 西洋封建社会成り立期の研究 安藤 英治殿
- マックス・ウェーバー研究 一五巻 安藤 英治殿
- バートランド・ラッセル著作集全 安藤 英治殿
- 資本主義の歴史的問題 安藤 英治殿
- 経済史随想 安藤 英治殿
- 西洋経済史 安藤 英治殿
- 一般経済史 安藤 英治殿
- アメリカ資本主義発達史 安藤 英治殿
- 恩寵の生涯 高村 象平殿
- 星の王子さま 鈴木 皇殿
- 日本語の歴史 岡田 昭夫殿
- 黒住宗忠 平 凡 社殿
- 言語その他 原 敬吾殿
- 大学経営の理論と実務 原 敬吾殿
- 世界の中の日本 飯田宗一郎殿
- 私には日本人になりたい 大江 精三殿
- 住居学 グローダース殿
- 大河内賞論文集 大河内記念会殿
- 老水夫行 吉阪 隆正殿
- キーツ詩選 老水夫行
- In Memoriam 吉阪 隆正殿
- 文学としての聖書 斎藤 勇殿
- 文学の世界 斎藤 勇殿
- 英国詩文選 斎藤 勇殿
- 英語のうた 児玉 久雄殿

(昭和四一・五・三一現在)

セミナー・ハウス印象記 その2

大学を考える学生として



るべき姿の差の大きさにとまどって、どこから手をつけたらいいのかわからなくなってしまう。こうした状態の私に何を為すべきかを教えてくれたのが、落成記念セミナーでの大塚、高島両先生の示された社会科学の学問的精神であった。(慶応大学)

共同セミナーに参加して

藤本 紘

現在の大学においてその重要性にもかかわらず、教養課程ほどつまらないものはない。多くの学生は不満と焦りを感じながら、二年間を過ごしてしまう。私の場合も例外ではなかった。ところが昨年七月の開館記念セミナーは、入学以来、「大学生活はこれで良いのか」という疑問に十分答えてくれた。

学問という目的をひとつにする二十数大学の学生と教授が、あるテーマの下に互いに啓発しながら、望める限りの環境の下で寝食を共にするという大学共同体の姿がそこにあったからである。しかし三日間にわたる密度の高い、熱病にかさされたような生活のあとに待っていたのは相変わらずの大学の講義であり、現実とあ

新しい芽を育てる

芳山 邦弘

開館ここ一年、大学セミナーハウスは幾多の学生に種々の影響を与えてきた。批判はあろうけれど、また物足りなさはあろうけれど、「共同セミナーに参加したあのグループは現在も読書会等を通じてお互いの学問の研鑽を確か合っている」というふうな、その存在価値を高めていく方向に新しい種子と新しい芽を育てている。

現実が調和した一種の新しい大学教育運動の発祥の地となるに違いない。我々はセミナー・ハウスの歴史的、かつ教育的意味を良く理解しそれを実行に移していくならば、明日の大学は今日の大学の姿と違って変わって、相互信頼の实を上げ、生き生きとした学問の府を見つけることができるであろう

と期待している。(早稲田大学)

二つの重心

海老沢 克之

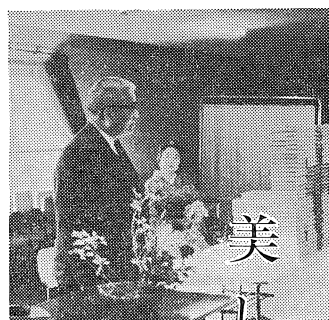
セミナー・ハウスの意義については各界から高く評価され、繰り返すまでもないが、体験者として、私は次の二点が大きな意味を持つと思う。ひとつは青年が考えなければならぬ問題を提起し、解決の手掛りをつかむ場であること。もうひとつは人間の本来の交友関係を結べる場であること。

各分野の権威者、大先生の講義を聞き、具体的に私たちに問いかけるセミナーは短時間であつても、かけがえのない経験である。第二に同じクラスでも、素朴な意見の交換が困難な今日、見知らぬ学生と寝食を共にしながら、根源の問題を語り合うことができる不思議な出来事。善意にあふれた先生方とともに、人間存在の意味を問うような話し合い……、深夜に及ぶ討論は、得られた知識よりその行動が私たちの学生生活に刻みこまれるべき意味を持つのではないか。(東京工業大学)

一般教育の機会として

向井 千歳

楽しかったセミナーを終り、東京の雑踏の中に戻り、空気の汚な



ギデオン協会聖書贈呈式

ギデオン協会の聖書寄贈

ホテルなどの部屋に備え付けてある聖書は、国際的にも知られている日本国際ギデオン協会の寄付である。実業家のクリチャンが資金を出しあつて、聖書の無料配付をしているのがギデオン協会である。この寄贈の動機は、昨年七月の落成式に出席されたライオン歯磨の小林社長が、同協会に提案され、実現に至ったものである。

昭和四〇月一二月二〇日午後二時三〇分から同協会の小林富次郎、石井小三郎、谷本正、西村善四郎、白井主事の諸氏により贈呈式が行なわれ、折りからセミナーにきていた東京女子大、早大、中大の学生約一〇〇名が参加した。なお孝館長夫人も同席され謝辞を述べられ、終って一同ささやかな茶会に歓をつくした。

い話

著書の寄贈

前号で平凡社が百科大辞典をはじめ、ほとんどの事典類を、斎藤勇博士や大河内東大総長が数多くの著書をご寄贈下されたことを報じたが、その後大塚久雄、増田四郎、安藤英治の諸先生が、新刊の名著をご寄贈下され、さらにみず書房から、バートランド・ラッセル著作集全一五巻の寄贈を受け、着々と図書室が充実していきます。大学の先生がその著書を発行の都度ご寄贈下されれば、セミナー・ハウスの図書室は大きな特色を持つであろう。

四五五本の植木

七年前のことである。

セミナー・ハウスをどこに建設するか敷地探しは、飯田専務理事には楽しい苦勞の種であった。財団法人も設立されていない夢のような時代に敷地を探すことは、相手にとっては真にたよりない話であつたらう。このたよりない話

さに顔をしかめている私ですが、同じような生活に戻ったように見えても、確かに私の心の中では大きな変化が起こった事がわかり嬉しく思っています。私は英文学専攻であり、今回の「科学と宗教」という題には非常に心配もしていたのですが、私なりにその中から得るものは大きかったと思っております。今回の経験により、知らない人、専門を異にしている人々と話し合う事の楽しさがわかり、心を割って話し合えば、今まで知らなかった人間同士が真に理解し合えるようになる。人間の「出会い」の素晴らしさに今感激しているのです。(日本女子大学)

Fの会の由来

長松 昭夫

第三回大学セミナーの結果でできたFの会は、読書を中心に続けていくつもりで、四月九、一〇日に二回目の集りをセミナー・ハウスで行ないました。私たちは交際範囲が狭く、特定の傾向を持った(おそらく自分と同じ傾向を持った)人々の間だけで、日々の生活を送っている有様なので、このようにいろんな人々と真剣に話し合える、そして理解し合える機会を与えて下さるセミナー・ハウスの存在は私たち学生にとって何と貴重なことでしょうか。私は東工大の

学部卒業後、大学院入学まで三年間社会でサラリーマン生活をし、社会の厳しさをおぼろ気ながら見えてきたような気がしますが、このような学生にとって天国のような場所と機会を与えて下さる陰で、飯田先生がどんなに苦勞なされているか、ほんの少しぐらいい

東南アジア留学生のオリエンテーション

昭和四一年四月一六日から一九日までセミナー・ハウスを会場として、本年度新しく日本にこられた東南アジアの留学生のためのオリエンテーションが行なわれた。留学生は女性五名を含め六六名で、インドネシア、セイロン、タイ、ラオス、マレーシア、ネパールなど一八カ国で、文部省の招き



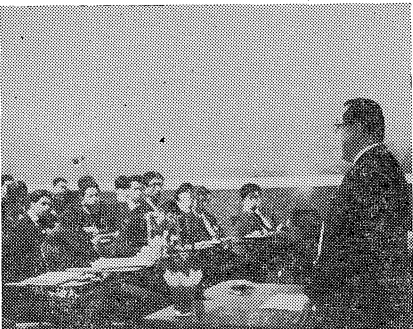
留学生到着

お察し申し上げられると思います。私はある会社をやめて大学院に戻って研究生活に入ろうかと大変迷った末、戻ったのですが、セミナー・ハウスにいらっている時、再び学生になったのは本当に良かったと心から思います。(東京工業大学)

による国費留学生である。

このオリエンテーションは、留学生たちから始め日本の文化、大学の教育や生活慣習に關し予備知識を与え、日本留学の成果を高めようとして文部省がはじめて計画したのである。

文部省、協会の方々、東工大、東京外語大、千葉大などの教官や日本人学生も泊り込みで彼らと生活を共にし、四日目にはお互いに別れを惜しむ程に友情を深め、非常な成功を収めたようである。



日本文化を講義する前田勝一先生

の片棒をかついで青梅や八王子の丘陵地帯を歩いてくれた人に現東京大学農学部助教授本間啓氏と現都西部公園事務所長山崎典氏があす。このお二人はセミナー・ハウスの恩人として銘記されなければならぬ。庭園の専門家であるこの二人は、セミナー・ハウスの環境づくりには何より有難い相談相手である。

今春の某日、事務所長室に山崎氏を訪ねた専務理事は、都の苗圃にある植木を構内緑化用に所望した。

山崎さんがこの申出に好意を示され有償払下げが実現した。ゆりのき、さわら、けやき、ライラック、こぶし、さるすべり等、二〇種四五五本という大量の植木が構内あちこちに植えられた。

河合良成会長の日本花の会から寄贈された花木三〇〇本とともに数年ならずして、セミナー・ハウスは四季を通じて花の名所となるに違いない。

武蔵工大の山百合

学生代表、教授有志と同宿された武蔵工大山田学長は、自ら陣頭に立って山百合の球根二〇〇個を植えられた。本館両側斜面、セミナー村のあちこちに初夏の頃ともなれば、美しい花を咲かすに違いない。その頃にセミナーにこられ



武蔵工大山田学長と学生たち

る学生の目を楽しませることである。その奉仕作業は昭和四〇年三月二二日であった。

学生の寄付金で

二〇〇〇本植樹

セミナーのために来館された学生が、個人として、またはグループとして、五〇〇円、一、〇〇〇円、二、〇〇〇円、五、〇〇〇円と植樹用に寄付金をおいていられる。積み積って一〇万円になった。植樹の好時節となったので、二月、三月にかけて、多種類の植木が構内各所に植えられた。

松一、〇〇〇本、杉五〇〇本、桧五〇〇本、計二、〇〇〇本の苗木を敷地内に植えた。

学生はいわば人間の苗木である。この苗木が育つ二〇年後、人間の苗木はどのように育っているであろうか。セミナー・ハウスの成果は二〇年後が最初の目標である。

昭和40年度(40年7月~41年3月)

セミナー・ハウス高率利用者

〔個人の部〕

〔大学の部〕

氏名	回数	回数	延人員	
①上智大学	5	①東京立大	27	651
②東京女子大	4	②早稲田大	15	606
③成京大	4	③東京女大	12	221
④日本文学	4	④慶応大	12	696
⑤立教大	3	⑤東大	11	401
⑥都立大	3	⑥日本大	11	1763
⑦早稲田大	3	⑦中央大	10	229
⑧慶応大	3	⑧山学院大	8	471
⑨立教大	2	⑨明治大	8	322
⑩日本女子大	2	⑩日本女大	7	119
⑪お茶の水大	2	⑪東京教大	6	80
⑫東大	2	⑫成蹊大	6	153
⑬立教大	2	⑬立教大	5	260
⑭東京工業大	2	⑭東大	3	50
⑮早稲田大	2	⑮お茶の水大	3	52
⑯慶応大	2	⑯法政大	3	53
⑰日本女子大	2	⑰武蔵工業大	3	75
⑱東京大	2	⑱東京農工大	2	41
⑳東大	2	⑳明大	2	12
	2		2	21



◆ 一月
東京大学教授 松尾 孝嶺氏
東京女子大学教授 玉虫 文一氏
東洋大学助教授 山本 尚志氏
第一回Fセッションセミナー
大島 貞夫氏
成蹊大学助教授 川口 浩氏
武蔵工業大学講師 菱山 幸有氏
東京女子大学講師 鹿取 広人氏
明治学院大学助教授 大島 貞夫氏

◆ 二月
東京教育大学教授 馬場 四郎氏
日本地域開発センター
国際基督教大学グリークラブ 茅 誠司氏
早稲田大学助教授 大川 邦雄氏
日本大学教授 大川 邦雄氏
早稲田大学教授 川西 誠氏
共立薬科大学教授 宮本 貞一氏
日本女子大学助教授 石橋 秀雄氏

国際基督教大学 "The ICU" 編集委員会
早稲田大学助教授 新沢 雄一氏
慶応義塾大学教授 片桐 邦郎氏
日本女子大学教授 中島 斌雄氏
日本大学教授 木村 禎司氏
東京学芸大学助教授 清水 阿也氏
日本女子大学教授 一番ヶ瀬康子氏
東洋大学教授 呉 主恵氏
中央大学教授 高窪 良誠氏
東京教育大学助手 小川 捷之氏
東京大学助教授 西村 秀夫氏
早稲田大学教授 植松 健一氏
東京工業大学教授 阿部 統氏

◆ 三月
東京都立大学教授 平田 光穂氏
東京教育大学教授 小原哲二郎氏
法政大学教授 芝田 進午氏
日本大学教授 渡辺 俊平氏
大成建設設計四課同期会
青山学院大学助教授 守永 誠治氏
武蔵工業大学教授 広瀬 謙二氏
東京工業大学全学祭委員会
成蹊大学教授 広合 良吉氏
早稲田大学文化団体連合会
東洋音楽大学講師 加藤 諱三氏
東洋音楽大学講師 河村 政敏氏
東京都立大学講師 木村 鍊一氏
東京大学教授 吾妻 潔氏
青山学院大学教授 沖中 恒幸氏
東京教育大学助教授 関口 武氏
東京女子大学教授 江口 祐子氏
早稲田大学教授 川原 栄峰氏

東京都立大学助教授 太田 秀通氏
東京都立大学教授 川田 雄一氏
青山学院大学助教授 栗山益太郎氏
慶応義塾大学教授 佐藤 豪氏
武蔵工業大学全学セミナー準備委員会
日本大学教授 岩井 肇氏
日本大学商学部経営学研究会
明治学院大学グレゴリー・バンド
日本女子大学講師 岡安 信男氏
日本女子大学講師 吉沢 英子氏
明治学院大学教授 渡辺 実氏
日本大学教授 篠原 弘志氏
成蹊大学教授 安藤 英治氏
青山学院大学教授 大野弥曾次氏

● ゲスト・ルーム宿泊者
◆ 一月
角田重三郎氏・茅誠司氏・柳瀬陸男氏
◆ 二月
馬場四郎氏・石戸谷哲夫氏・植松健一氏・吉田裕氏・諸井次子氏・芹沢明子氏・村元瑛子氏・橋本伸子氏・湯浅八郎氏
◆ 三月
小原哲二郎氏・深津葉一氏・山本利寿氏

編集後記

本号は一、二、三月の記事を重点的に編集しましたが、実際の発行は五月も終りに近く多摩丘陵は緑一色で、まさに青年の集う学園に相応しい環境です。巻頭文は笠信太郎先生が日本の知識人を代表して落成式に述べられたメッセージの概要ですが、セミナー・ハウス存在の理由が先生の該博な知識によって解明されています。忘れてならない運営の指針でもあります。大塚久雄先生のご厚意によって大学セミナー・シリーズ第一集が創刊されたことはセミナー・ハウスの成長を実証するもので、その序文で手塚富雄先生がお祝い下さいましたように真にうれしい限りです。思えば昭和二十七年四月一八日三井銀行での第一回理事会の折りに朝永振一郎先生が価値の高いセミナーの講義は出版したらよいと提案されたことを記憶していますが、その日が到来したわけです。開館一周年の七月五日も間近のことです。この計画をご支援下さった四本柱の上代、大浜、茅、佐藤の四先生がいよいよご壮健なことはセミナー・ハウスにとってもしあわせなことだと思います。(飯田生)